落語三百年

明治・大正の巻

小島貞二編

毎日新聞社

落語三百年

明治・大正の巻

小島貞二編

毎日新聞社

小島貞二（こじま　ていじ）
旧制豊橋中学校卒。元出羽海部屋力士。戦後東京日日新聞で相撲，演芸記者を勤めたのちフリーとなり演芸・相撲評論家として活躍。現在日本放送作家協会，東京作家協会会員。著書に「漫才世相史」その他がある。

落語三百年

明治・大正の巻

昭和41年3月20日　印刷
昭和41年3月30日　発行

定価　380円

編　者　小島貞二
発行者　赤木益一郎
印　刷　中央精版
発行所　毎日新聞社
東京都千代田区有楽町
大阪市北区堂島上
北九州市小倉区紺屋町
名古屋市中村区堀内町

〈検印省略〉

目次

かけ足落語明治・大正史　五
士族の商法　三
世辞屋　五
快楽亭ブラック自伝　七
桃太郎　八
花色木綿　八
官営芸者　一六

意地くらべ　一三一
アメリカ人の恋　一四六
お見立て　一六〇
野ざらし　一七八
支那の野ざらし　二〇〇
あとがき　二一一

さしえ　宮尾しげを

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

落語三百年《明治・大正の巻》

かけ足落語明治・大正史

一

明治の落語は三遊亭円朝からはじまる。

こういう話がある。

「上野の戦争の晩（明治元年五月十四日）には、私は日本橋の寄席伊勢本で、師匠の円朝が真（真打ち）で演っていました。客は相応に入っていましたが、あの戦争が始まりそうで始まらず、よもやに思っていたのが、いよいよその晩から翌朝にかけて始まるわけで、見附見付が槍襖で寄席のハネから通れません。ところによっては早くから通しませんものとみえて、師匠の円朝がどうしても参りませんので、私がかわりに出ましたが、客が承知せず困りました。何しろ戦争ですから仕方ありませんでした」（三遊亭一朝談「漫談明治初年」より）

この年（明治元年）円朝は数えの三十歳。すでに「真景累ヶ淵」（安政六年の作）「怪談牡丹燈籠」「菊模様皿山奇談」（文久年間の作といわれる）などをつくり、道具噺の名人としてその人気と名声

は江戸中を圧していた。

父（初代橘家円太郎・明治四年十月十五日没）も母（明治十二年六月二十四日没）もまだ健在だったが、師匠である二代目の三遊亭円生（文久二年八月十二日没・五十五歳）はすでになく、浅草裏門代地の家には弟子や家族など十五人が住み、その面倒をみていたから、人気のわりには決してゆとりのある暮らしではなかった。

思い出を語っている一朝は当時勢朝といい、円朝内弟子の一人であった。武州（埼玉県）所沢の士族の出で、十九歳で弟子入りしてこのとき二十三歳。その後円蔵、小円朝（初代）、円楽を経て三遊亭一朝（二代目）となり、円朝ゆずりの芝居噺、人情噺に長じ、師匠に最後までつくした逸話は有名。長命を保ち三遊派の稽古代として多くの若手たちを指導した。現古今亭今輔、林家正蔵が演ずる怪談噺はいずれもこの一朝ゆずりである。昭和三年五月十一日、八十四歳で没している。

当時伊勢本クラスの一流寄席の木戸銭は三十六文。幕末時代の四十八文より安くなっていた。寄席そのものは不況だったのである。

またこういう話もある。

「どうなるかと思っているうちに（つまり維新のゴタゴタで）、明治二年の七月、手札大の木札が下ったね。それが鑑札だね。それを貰ったのは角力全体と、東京の寄席芸人と役者である。（中略）当時芸人の給金というと全くお話にならない。普通の芸人はお客一人について二文ないし三文も

らう。それが普通で、人気のあるのが四文もらう。さァ四文もらうと大喜びで強飯を炊いて配ったくらいである。真打の給料がやっと六十文ないし七十文。百文取るのはわずかに円朝と紫朝と柳亭燕枝ぐらいなもので、この三人を大真打ととなえていた」（加賀太夫談「漫談明治初年」より）

紫朝というのは当時新内なら日本一と謳われていた盲法師の富士松紫朝。間もなくわけがあって生まれ故郷である九州の久留米へ引っ込んだが、芸も名人なら弟子の指導もきびしかったという。柳亭燕枝は「談州楼」と号し、本所南二葉町に住んだところから「二葉町の師匠」で通った人情噺、三題噺の名手。円朝が三遊派の首領であったように、燕枝は柳派の主柱をなしていた。そのころの寄席はどんなものをやっていたのかというと、明治三年六月二十三日付の「東京府達」にこういうのがある。

「市中の寄席は、講談昔噺などに限って営業するのはよいが、浄瑠璃人形を取り交えたり、男女入り交っての物真似などはいけない。これは以前（前年十月）に布告されたのであるが、最近はまた乱れているから、厳守してもらいたいと、世話掛・年寄に達しられる」（「明治世相編年辞典」より）

同じような布告は五年一月にも出て「新宿、板橋方面の寄席も市中に準ずるように」となり、さらに六年九月には「府下の寄席では、まだ手踊りなどを催すものがあるときく。かねての布達通りきっと取り締るように」と念を押している。

では一体、東京にはどのくらいの寄席があったのか。

「明治の初年には十六軒ありました。（中略）そのころので今残っている有名なのは岩井町の人形芝居の末広、今は東朝座となっているが京橋の金沢や、銀座の鶴仙なども明治の前からありました。あの席も人形芝居などをやりましたが、あれは私が落語家にならない前でしたろう。神田新石町の立花亭はごく古い老舗です。本郷の若竹も古い」

これは三代目柳家小さんが大正の末に語ったものの中の一節である。小さんが燕枝の弟子になったのは明治十四年だが、その前は常磐津をやっていた。維新の芸界を体で知っているわけだ。だが「明治の初年には十六軒」という寄席の数にはいささか疑問がある。というのは筆者手持ちの「明治元年以来東京色物寄席」（写本）をみると、明治五、六年ごろにあった寄席が東京市内（旧江戸）で二百余軒を数える。もちろん中には寄席とよぶにはおそまつな端席もあるが、神田の立花、本郷の若竹、京橋の金沢級の一流どころでも十六軒ではきかない。

たとえば天保十三年の改革のとき生きのびた十五軒のうち、土手蔵（江戸橋）、万長（麹町）、目白亭（音羽）、竹之内（下谷）もあり、改革以後に出来た山二亭（日本橋）、吹怒喜（下谷）もあり、円朝がよく出た垢離場（本所）、伊勢本（日本橋）もあり、また現在の末広（人形町）もあった。相撲の行司式守伊之助が経営した大ろじ（日本橋）、柔術の先生磯某がはじめた磯亭（神田お玉ヶ池）などの名も見える。昭和まであった芝の恵智十は、それまであった松琴亭という寄席を明治六年に改称したものだし、現在の上野鈴本は幕末時代から「本牧亭」という名の軍談席だったのを、明治九年に場所をかえて色物席にしたものである。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

十六軒という数は、若き日の小さんの守備範囲をさしたものかもしれない。ともあれ明治五、六年から十年にかけてのころは、寄席の大きな新陳代謝のときであったことはたしかだ。

本所石原町に「魚清」という江戸時代からの寄席があった。明治七年五月五日、菖蒲家佐和之助という「きやりくずし」で当時人気の女芸人が出たところ、客がつめかけすぎて二階が落ち怪我人多数を出したので、この寄席はそれっきりつぶされてしまった。

このように明治も七、八年ごろまでは、寄席の規模も演目も取り締まりも、そして出る芸人にも客にも、まだ江戸の匂いが色濃くのこっていたことがわかる。では近代化はどのようにしてはじまったのだろう。

明治九年四月、重大な意味をもつ出来ごとがあった。東京府庁は諸芸人に税金を課し、同時に各芸界に組織化を命じたのだ。その結果麗々亭柳橋（三代目）、桂文治（六代目）それに円朝の三人がえらばれて「落語頭取」となった。三人が月番で「頭取」を担当して落語界をまとめてゆこうというのである。

柳橋は人情噺の大家で「髪結新三」「四谷怪談」などはこのひとの作と伝わる。のち柳桜となり、明治十七年六月八日、六十六歳で没した。文治は四代目文治の長男で、芝居正本噺の名人と謳われ「西郷隆盛」「上野の戦争」など一連の維新の戦記ものが有名。明治四十四年二月十六日、六十九歳で没。柳橋の亡くなる十七年までがいわゆる三頭取時代だが、この間に寄席は内外から改革された。

明治十年二月になると大警視川路利良の名で「寄せ席を営む者はその区長の奥印をもって、東京警視本署へ願い出鑑札を受くべし。但し廃業の節は本文の手続きを持って鑑札を返納すべし」というような十一ヵ条にわたるきびしい「寄席取締規則」が布達された。その第九条に「種々の名目をもって来客へクジを売り出来を促すべからず」というのがあった。

このクジ売りについては円朝は以前から「出来ることならやめさせたい」と考えていた。寄席の仲入りを利用して、前座が客にクジを売りつけることは「江戸の巻」にも書いておいたが、はじめは給金のない若い落語家たちのために、客が祝儀がわりに買ってやるという好意であったのがだんだんとでたらめとなり、売る方はそれを当然の権利のように考えて、景品なども平気で渡さない。もっとひどいのは、真打ちによってはそのクジの売りあげを半分まきあげてしまう。客だって迷惑だから、中には「馬鹿野郎、そうそう毎日つき合えるかい、面ァ見て貰いに来いよ」などと、ポーンとタンカをぶっつけるようなものも出て来ていた。

いくら伝統だの習慣だのといっても、客に負担と感じさせては洒落にならない。円朝はまず自分の出る席からこれをやめさせ、かわりに前座になにがしかの給金を与えるようにした。そのころ「取締規則」も出たわけだ。十一年十一月に千住の義太夫の席で、下足札の番号でクジをやっているのがお手入れを喰ったりしたので、ほかの寄席からも十二年ごろには全く姿を消した。

また十一年三月の朝野新聞によると「柳橋、円朝、文治などは、下がかりの咄はつつしんで、勧懲を旨とするように申し合わせ、後輩をさとした」とある。世間一般からいえば小さなことか

もしれないが、内面からの浄化運動としての意義は大きい。

ちなみに明治九年度の「開化東京土産」によると、落語家の総数は二百八十二人。寄席の数は十年十二月現在で百六十二軒、観客動員が月のべ二十万七千四百十二人とある。景気はよいようだが、一軒あたり一夜の客は五十人に足りない。円朝の出る寄席は大入り満員なのに、あとはガラガラという光景も想像される。景気は決してよくなかったのである。

「これではいけない。何とかしなければ……」という落語家たちの工夫と研究が、やがて「珍芸」というとび道具を生む。いわく「ステテコの円遊」「ラッパの円太郎」「ヘラヘラの万橘」「釜掘りの談志」という面々である。

二

明治十四年三月十六日の「諸芸新聞」にこんな記事がある。

「愛宕下の恵智十に『東西東西此所お目にぶら下りますは当世流行高座の素手天固』と大書した大看板を出して、ステテコの円遊、ラッパの円太郎、ヘラヘラの万橘、ペケレッの談志など似顔画をはり出して大奮発で演じ、毎晩大入りの客留め」

この円遊、円太郎、万橘、談志は「四天王」と呼ばれて、落語以外の珍芸で寄席をひっかき回した人気もの。功罪は別として彼らを除いて明治十年代の落語は語れない。

三遊亭円遊は小石川小日向水道町の紺屋のせがれで、芸事が好きで新宿で幇間をやり、十九歳

で二代目五明楼玉輔の門下になり、玉輔が廃業したので円朝門下に転じたのが明治三年。アバタ面で大きな鼻、愛嬌のある語り口の陽気な芸。古典をどんどん滑稽化する才能にもめぐまれ、明治十五年、二十六歳で真打ちとなった。地味な芸風の円朝にとっては異質の弟子といってよい。円遊の二代目であるはずなのに人呼んで「初代」とたたえる。

「ステテコ」という妙なおどりをはじめたのは明治十三年の十一月、浅草並木亭で円喬の前に出たとき、「アンヨを叩いてしっかりおやりよ、そんなこっちゃなかなか真打ちになれない」など即興の歌を唄って、鼻をつまみ、手首を動かし、ひざを叩いて踊りまくった。これがやがて円遊一流の愛嬌となってパーッと人気が立った。根は吉原の幇間の芸であったという。

その人気絶頂のころのひとこまをのぞくと、「寄席芸者ひっくるめて、円遊が一時の人気ほど大したものはあるまい。実に品川の席から吉原の席へ行く。その通り筋の席亭はのこらず出勤したという。その数は何十軒、まァ高座へ上って何を演ったろう。その忙しさ、楽屋口で俥を下りる前に誰が上っていてもすぐ下して、高座へ上る。ちょいとステテコか何かやる。お客はそれでもう大喝采。その間四、五分、高座を下りる、俥へのる、次の席へ走る。そのころ車夫をしていた今玉乗りで愛嬌を売っている遊六は、三日目に血を吐いたという。しらべてみた過去帳、圧巻の人気は実にこれ円遊のステテコだった」(森暁紅氏・大正元年九月刊「芸苑」より)

もっと極端な例では、入口からステテコを踊りながら客席を通って、そのまますうっと裏口へ抜けて行くだけで客は熱狂したという。今のどんな神風タレントも当時の円遊には及ばないであ

ろう。なお男の下着で、猿股より長く、ヒザのあたりまである股引きのことを「すててこ」というのは、高座で円遊がはいたものから名がついたというあたり大したものだ。明治四十年十一月二十六日没、五十九歳。

万橘も三遊亭という亭号がありながら、のちには「ヘラヘラ坊」と名乗った。最初円朝の弟子で和朝といったが、のち円朝の高弟円橘の弟子とかわって万橘となった。落語は下手くそで、小咄を少しやっておいて「ヘラヘラ」にとりかかる。羽織も手拭も真っ赤、着物をはだけるとシャツも赤く、扇子をひらくとこれも真っ赤。こんな左翼政党がよろこびそうないでたちで、楽屋の太鼓に合わせ、うしろの羽目板を叩きながら、

「赤い手拭赤地の扇、それをひらいておめでたや、ヘラヘッタラヘラヘラヘ、太鼓が鳴ったらにぎやかだ、大根が煮えたらやわらかだ、ヘラヘッタラヘラヘラヘ……」

などと他愛ないことを歌い踊った。はじまりは円遊のステテコとほとんど同じころ。晩年旅に出たまま消息を絶ったというから没年は不詳。

円太郎はやはり円朝門人で最初は芝居噺の道具方をつとめていた。万朝から葉朝、円好から橘家円太郎の四代目をついだ。根が音曲師だからラッパを利用したわけだ。プップウと鳴らして高座に出る。そうして都々逸だのカッポレだの三下りだの、唄いながら合間にプップウと入れ、たまには「おばあさん、あぶないよ、プップウ」というような愛嬌をふりまいた。かみさんが下座をやり、いつも合乗り俥でかけ持ちしたのも人気を呼んだ。

何せ当時、東京市中を鉄道馬車が走るころで、馭者のラッパがおなじみだった。のち馬車が市営バスにかわってからも、そのバスのことを「円太郎馬車」と人々は呼んだというあたり、いかにすさまじい売れっ子であったかがわかる。明治三十一年十一月四日没。

立川談志は四代目の談志だ。文治（六代目）門下の落語家。一席終わるとおもむろに羽織をうしろ前にする。手拭を四つにたたんでうしろ鉢巻きにして、扇子を半開きにして襟元へはさみ、座蒲団を二つに折って子供のように抱き、

「そろそろ始まるカッキョの釜掘り、テケレッツのパァ……アジャレン、モクレン、キンチャン、カーマル、セキテイよろこぶ、テケレッツのパァ……」

など楽屋の符丁まじりの妙なることをいいながらぐるぐる回り、蒲団をそばへおき扇を鍬（くわ）に見立てて、土を掘るしぐさをする、つまり唐土の二十四孝からとった郭巨（かっきょ）の釜掘りというマイムである。これがまたやんやと受けた。四天王の中では一番早く、明治二十二年五月十日に没。

一人でも大変な人気のところへもって来て、ときによっては四人がそろって出ることもある。そんなときには近くの警察からお巡りがくり出すさわぎになったという。大将株は円遊で、自分の高座が終わると「割り出し」と称して、一同勢揃いして掛け合いやら踊りやらをサービスした。これを描いた錦絵もとぶように売れた。この気違いじみたブームは十八年ごろまで続いた。

なお、それまでひと晩の高座数はせいぜい七、八つだったものが、十高座以上にふえた。珍芸連のかけもちのため、自然に一人の持ち時間が少なくなり、出演者の頭数がやたらにふえたため

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.